

## チヨオーサ「善女列伝」序歌・註

比 良 俊 典

AG, BF 両テキストの裡, 手近な所では Skeat ( *Oxford Chaucer*, III, xxi-xxv) が BF を AG の revised version と考え G version (詳しくは Cambridge University Library Gg. 4.27) を A, F version (Fairfax 16, Bodleian) に代表される versions を B と名付けたが, Ten Brink の提唱以来今日では逆に AG が BF の revised version になっている. この点に付いては *Cambridge Chaucer*, p. 839 を参照のこと.

これと關聯して両 versions の日付は BF が Deschamps の *Lay de Franchise* に負う所大なる点 (J. L. Lowes, *The Prologue to the "Legend of Good Women" as Related to the French "Marguerite" Poems and the "Filostrato," PMLA*, XIX (1904), 593f.) 1386年, AG は1394年頃と考えられている.

執筆の動機は定かではないけれども Queen Anne の要請に依る (Lydgate, *The Fall of Princes*, quoted by Skeat in his *Oxford Chaucer*, III, xx) とも, 1385年2月これより先1374年6月任命されていたロンドン港の羊毛の関税事務に「常任代理」を置く許可が Anne の計で下りたことに対する御礼の気持から (Ten Brink, *Chaucer Studien*, Munster, 1870, pp. 147f.) とも, また仮に the god of Love が King Richard を Alceste が Queen Anne を表わすものとして (Skeat, *Oxford Chaucer*, III, xxiv) 『薔薇物語』とか『トロイラス』の執筆が王の不興を買い王妃の執成で愛の神に背いた償として善女のことを書く気になったとも考えられる. 孰れにしても伝統的な宮廷の趣味を慮ったということは想像に難くない. Richard の宮廷で「恋の遊」がどの程度行われていた

かは不確だが Chaucer は『誉の宮』で恋する者の愛の便を聞こうとして果さず『百鳥の集』でも愛の品定を中断し結局クレンダがトロイラスを捨てるといふ形で人間臭い愛に興味を示していた点、これに続く『善女』で今度は反対に愛の神の教を守り女性を称えているのは新しい王かそれとも王妃の思がめでたからんことを慮っているものと思われる。「この書をものしたらばエルサムカリッチモンドに在すお妃に参らす」と Queen Anne に対する献呈の辞を事実述べている (BF, II. 496—97). 1386年を軸として運命の女神の車は下へ向かって廻り始めた. 'For whan men trusteth hire, thanne wol she faille,/And covere hire brighte face with a clowde.' それ迄この車を大きく上へ向かって廻すのに与って力があつた patron の一人 John of Gaunt は王権の振張拡充を図る Richard と仲達し1386年7月カスチリヤの王になろうとして英国を後にした.

Ve terre vbi puer rex est

*Piers the Plowman*, ed. Skeat, I, B-text,  
Prologue, p. 16

年若い王の治世は乱世という謂に違わず John に代って前年、英仏海峡沿岸でフランスの軍船を撃退、一時的勝利を収めた弟 Thomas が抬頭、王、John に比し Chaucer は Thomas とは関りを持たなかったから王や王妃の庇護を求めていたのではあるまいか. Chaucer は1385年10月ケント州の保安判事、続いて86年8月同州選出の国会議員の一人に任命され10月にはロンドン港の税務監督官に就任の際(1374年5月)同市より与えられたオールドゲートの官邸を明渡しているから早ければ85年秋、遅くとも86年秋迄にロンドンを離れたことになる. Chaucer のケント行に就いては王の配慮があつたとも Chaucer の願出に依つたとも云われている (French, *A Chaucer Handbook*, p. 65) けれど真偽の程は詳らかでない. 只、宮廷の政変が何等かの形で関りを持っていることだけは確で、因に86年暮(12月)先に羊毛は85年2月、酒は税務監督官に任じられた82年、

それぞれ常任代理を置く許可を与えられていたにも拘らずこれらの官職は二人の別人に委譲されている。この官職剥脱は Thomas の意趣から出たものではあるまいかということは想像に難くないけれど『善女』執筆の意義が王の庇護を求める点にあったとすると『善女』の中断は唯 Chaucer の興味が『キャンタベリー物語』へ移ったということばかりでもないのではないか。87年には Thomas は John の子 Henry 等を糾合、王と対決した。戦では勝算がないことを見てとり王はこの伯父の申入を入れて翌88年2月に議会の召集を約した。これが世に謂う ‘merciless’ Parliament である。この議会（2月3日から6月4日まで）で王党派の主だった人々の多くは断罪されたけれど Chaucer はケントで事なきを得た。この点に就いて Chaucer は断罪に価する程有力な存在ではなかったとも考えられる（Brewer, Chaucer, p. 180）が縦んば Chaucer が王党派でなかったとしても王の信任を得、身分からいっても Chaucer と略同等の Thomas Usk の様な人が罪に問われているから Chaucer の断罪が考えられたとしたら Henry が詩人に有利な具申を Thomas にしたという風に考えた。い。89年成人に達した Richard は5月の議会で王権を主張、親政を施行した。時を出ずして（7月）王は Chaucer を王室建造物監督官に任じた。Chaucer の身分でこの官職を得た者は眇い様なので王の寵愛の程も知られる訳だが23ヶ月この任に留ただけで91年6月にはサマセット州のノース・ペサートンにある王室所有林の代理官に任じられ98年、ロンドンへ帰る略一年前迄この官職にあった。この王室林はマーチ伯爵、Mortimer に委ねられていたので直接王の任命ではないけれど在任中もケントに住み折にふれ上京していたから引続き王の庇護を受けていたものと思われる。事実93年正月には王に対する勤勉の返報として10ポンド、翌年2月には王室建造物監督官の報酬で滞っていた分給の支払を受け新たに年収20ポンドの支給を下賜されている。この年王妃 Anne が亡くなったため Chaucer は王妃に対する『善女』献呈の辞を削り恐らくは翌95年か翌翌年『序歌』を改訂したものと考えられる。Anne の場合同様 Richard の新しい王妃 Isabel との婚約を祝って『序歌』の改訂を行った（Cambridge Chaucer,

p. 840)とも考えられないことはないけれど王は Anne の死を悼むあまりリッチモンドの屋敷を放棄、取毀しを命じたと伝えられているので王の気持ちを酌み献呈の辞は無論のこと Anne を雛菊に見立てたとして王妃を誉めた個所の大半を削除したのではあるまいか。それかあらぬか『序歌』AGの方は現在一種類の写本を残すだけなのでそんなに流布していたとは考えられない。雛菊讃美を削った外、BFに対しAGの改訂で主立った変更は婉曲な宮廷愛批判と本能的愛に対する興味それから Chaucer が翻訳した宗教作品（‘of the Wretched Engendrynge of Mankynde/As man may in pope Innocent yfynde,’ G 414—415）の追加等である。

### Chaucer の Skepticism, II. 1—16

13世紀とすると14世紀は教会の腐敗著しく、その富、特権、知識、延いては教理そのものまで庶民の社会的地位、知識の向上と相俟って漸く問題になって来た。1370年代も末になると所謂「百年戦争」の不首尾、少年王の即位と John of Gaunt の権勢、教会の大分離と Wyclif の異端を契機として教会攻撃が表面化した。教会の富と特権は宗教界が教皇を頂点とする一つの王国を成していて 剩え王の高官には 司教が任じられていたことに基いているのだが1369年百年戦争再開後は英軍に利あらず敗退を続けたので早速司教政治が改めて問題となった。（例えば Gower, *Vox Clamantis*, tr. E. W. Stockton, in the *Major Latin Works of John Gower*, p. 120参照）百年戦争の当初から教会は戦費の負担を免れていたため1371年 Chancellor, William of Wykeham が下院に戦費の支出を要請した際下院は John of Gaunt の助を借りて反対、尤この時は押切られたけれど、1380年には同じ戦争継続を目的とする人頭税を教会に分担さすことに漸く成功した。下院は主に郷士、商人の代表で構成されていたのだがこの階級は騎士の軍役拒否、傭兵制度の拡大で以て漸次騎士に代り院の内外に亘って王の戦、治安に協力即ち兵の徴発、指揮、戦費の調達、献金なぞで社会的地位を著しく向上させていた（Chaucer の商人は顎

鬚を二俣に分けて蓄え色んな色を染分けた高価な服を絡い頭にはフランドル製の海狸の帽子を被っているから 'For sothe he was a worthy man with alle' ということを示している。郷士も亦偉い人で Chaucer はこの白い顎鬚を蓄えた男が巡回裁判の折には司会を勤めたり幾度か代議士に任命されたり州長であるとか会社監査官であるとか中央、地方を問わず色々な要職を歴任していることを一一数え上げている)。これに伴って知識も増大、各種教育機関を経て法曹界、聖職へ進む者も少くなく (Chaucer の Man of Law のモデルと思われる Thomas Pynchbek は庶民の出、亦 Parson も Plowman と兄弟) 上流社会の学問、教養を摂取同化はしたけれど、この階級は金勘定とか取引とか勤勉で節儉とか貯蓄とかいった実際に即して地位を向上させて来た (『船乗の話』に出るサン・ドニの商人は賽子遊もダンスもしないで買ったり借ったり取引に忙しい思をしている。郷士は自分の話に出てくる騎士の従者アウレリウスにドリゲンが示した恋の条件、ブルターニュの海岸から岩を全部片付けるため奇術家が要求する純金で千ポンドの支払を約束させたり、ドリゲンの貞節で求愛が失敗すると費用の支払を年賦ですることを考えさせている) だけにその考え方、生活方式は大変現実的、人間的で宮廷、特に教会の精神主義、理想主義とは相容れないものがあった (Chaucer の郷士はエピクロスの子みたいな男で快樂を信条としている)。

教会の腐敗は教会が人間的なもの世間的なものを軽視、霊的なもの理想的なものを絶対とする (例えば *Introduction to Saint Thomas Aquinas*, ed. A. C. Pegis, pp. 435—437) 点富と特権の所有に起因している ('The Clergy may not hold property,' *The English Works of Wyclif*, ed. Matthew, pp. 368—9) が知識の普及 (例えば英語の発達、John of Trevisa's Translation of Higden's *Polychronicon*, Chap. lix 参照) 人間的なものに対する関心の増大に伴って教理其の物が問題にされるに至った。Chaucer の Monk は St. Benedict とか St. Augustine の戒律を人間性に合わないものとして無視、狩猟に興じている。貴族の食卓でも聖職者さえ加えて三位一体の教理に冗談を飛ばせ神格とか神性を問

題にしている。こうした類のことで原罪の教義も偉い人々の間で問題となり *Piers the Plowman* なぞの作者に依って可成広い範囲に流布していたものと思われる。

I haue yherde hiegh men · etyng atte table,  
 Carpen [=chatter] as thei clerkes were · of Cryste and of  
 his mightes,  
 And leyden [=laid] fautes vppon the fader · that fourmed  
 vs alle,  
 And carpen ageine clerkes · crabbed [=peevish] wordes;—  
 “Whi wolde owre saueoure suffre · suche a worme in  
 his blisse,  
 That bigyled the womman · and the man after,  
 Thorw whiche wyles and wordes · thei wenten to helle,  
 And al her sede for here synne · the same deth suffred?  
 Here lyeth yowre lore”. thise lordes gynneth dispute,  
 “Of that ye clerkes vs kenneth [=teach] · of Cryst by  
 the gospel;

Filius non portabit iniquitatem patris, &c.

[=The son shall not bear the iniquity of the father]

*Piers the Plowman*, ed. Skeat, I, Bx, p. 292

70年代後半からは別けて教会に執って多難な時期で skepticism が蔓延、神学者では Wyclif が *the oste* の教理を攻撃、延いては聖書の翻訳を企てた。Wyclif は初め教会が富とか世俗的特権を所有することを非とし王に委譲すべきを説いて Gregory XI と利害が撞着、次いで Urban VI に対し神の義に悖らぬ生方を期待したけれど教皇の分離が起きるに及んで墮落した聖職者が *the oste* を授けることに反対、偶有性を実体に変える *transsubstansinge of the oste* を *miracles that ben feyned that no*

*man may see ne knowe* ('Of Confession,' Matthew, p. 345) として斥けるに至った。この教は John Aston とか Nicolas Hereford のような後継者によって継承、流布された。Chaucer もこの点について後年 (1390年頃) *the oste* の概念を裏返して料理人は「実体を偶有性に変えてしまう」(VI(C), 539) と *Pardoner* に云わしている。1381年の百姓一揆は直接には黒死病による農耕人口の激減、人頭税の重荷に因を発するものだが Wyclif が神の目には人相互に差はない (Matthew, p. 227) と説いている点 John Ball のような司祭が仮令この考を一揆に利用したものであってても Wyclif の教が全然一揆と無関係という訳ではない。Wyclif の教は色んな方面に亘って広く多数の追随者、支持者を発見、騎士、郷土、商人の階級にも支持者が多かった。Wyclif の教を信奉、遊説する聖職者の取締を王と上院だけで可決、法案を下院に諮問しなかったことに対し下院は法令の撤回を要求 (1382年) Wyclif の追随者を助けた。議会に席を持つ騎士の中でも枢密顧問の Sir Richard Stury とか Sir Lewis Clifford, John Montagu 公は Northampton 州の有力な郷土 Thomas Latimer などと一緒に Wyclif の教を実践、司教と敵対した。1395年 Stury を始とする所謂 Lollard Knights (この中には Chaucer の知己友人多し) が教会の改善諸般に亘る意見書を議会に提出したことに対し司教の要請で王は Stury に所信の放棄を強要、爾来 Wyclif の教は議会に提出されることもなく英国よりも寧王妃 Anne の生国ボヘミヤで勢を得ることになって行った。この点に關聯して王妃 Anne のような貴人 (Joan of Kent も含めて) も早くから Wyclif の教に興味を示していたと云われている。(Chute, *Geoffrey Chaucer of England*, pp. 201—202). 宮廷、議会がこの有様だったから80年代から90年代へ掛けてのロンドンでは英国でも最も *skeptical* な空気が強い所の一つだった様で Thomas Walsingham は1392年のロンドンに言及して '*ac male creduli in Deum*' と嘆いている (Thomas に拠り *Medieval Skepticism and Chaucer*, p. 154に引用). 王、司教がこうした *skepticism* の蔓延を食止めようと腐心したことは言うを俟たないのだが悔悽の

強要は一般には稀で大方は金で罰を免れていた。

Whilom ther was dwellynge in my contree  
 An erchedeken, a man of heigh degree,  
 That boldely dide execucioun  
 In punysshynge of fornicacioun,  
 Of wicchecraft, and eek of bawderye [=pandering],  
 Of diffamacoun [=slander], and avowtrye [=adultery],  
 Of chirche reves, and of testamentz,  
 Of contractes and of lakke of sacramentz,  
 Of usure, and of symonye also.

III(D), 1301—1309

### Chaucer の 蔵書, II. 17—28

Chaucer はAテキストの273—274行で愛の神に Chaucer が「今のもの、昔のものの合わせて六十数冊の書」を持っていることを云わしているけれど若しもこの行が本当に Chaucer の蔵書に言及したものなら当時英国で最も多くの蔵書を誇っていた Canterbury の Christ College の図書館でさえ高高700冊程度だったから Chaucer は大変な書持ということになる (Chute, p. 149参照). 尤当時本は未贅沢品で個人が沢山の本を蓄えると云う観念は殆どなく貴族でも大方の場合礼拝用の詩篇に一冊か二冊程度のフランス語のロマンスを持っているにすぎなかったと云われている (Chute, p. 149). 無論本は大変高価なもので普通現在の邦貨に換算して14, 5万円から20万円もしたので Chaucer の本が凡この類でないとしても Chaucer の蔵書は充分誇るに足りるものである. だから当時の本は一冊に色んな話とか教とかを集めたものが多くヨヴィアヌスに対し一書を物したローマの学者聖イエロームの書物もある (III(D), 673—675), ソロモンの格言とオヴィディウスの『恋愛術』が同居している (III(D), 679—



680) と云った塩梅で別に話であるとか 説話であるとか 格言の相互関係が考慮されている訳ではない。尤オリジナルが入手出来ない様な場合は自分で写すこともあったから自分が写したものを愛読したためか、それとも人が写して好い加減使ったためかその孰れであるかははっきりしないけれど Chaucer は使い古して旧くなった オヴィディウスの本のことに言及している (PE, 110) 点、全部が全部文集と云うのではなくってアリストテレス (例えば I (A), 295 参照) とか ヴァレリウス・セオフラストス (III (D), 671 参照) と云った偉い人々の夫々独立した本も 相当持っていたのではないか。所謂「古本」はぐっと安い所では数シリングで求められるものも多かったと謂う。

#### 読書家 Chaucer, II. 29—39

Chaucer の時代では Petrarch に Edward III の高官 Richard de Bury が大変な蔵書家で塵の山、鼠の汚物にもめげず本を買集めたと云う (Chute. pp. 149—150)。別けて de Bury は金に糸目をつけず貴重な書を漁り取扱上の注意を事細かに指示して本の保存に苦慮している。風邪をひいている時はハンケチを使用の上書を繙くとか、子供が構わず弄って汚すのを怖れ泣く子には大文字の中に描いてある絵を見せてあやしたりしないとか、頁の余白に書込をしたり押花をしたりして本を汚さないとか云った調子である。Chaucer がそんな高価な？ 本を沢山持っていたかどうかは兎も角大変な読書家であったことは *The House of Fame*, II. 652—660 にも見えている。Gower の本に対する姿勢参照のこと (*Confessio Amantis*, Prologus, lf.).

#### ‘The Month of May,’ II. 36—38

Sq T, 275—282 比較参照。

This noble kyng is set upon his trone.  
 This strange knyght is fet to hym ful soone,  
 And on the daunce he gooth with Canacee.  
 Heere is the revel and the jolitee  
 That is nat able a dul man to devyse.  
 He moste han knowen love and his servyse,  
 And been a feestlych man as fressh as May,  
 That sholde yow devysen swich array.

**The Panegyric of the Marguerite, ll. 43—196**

「雛菊讃美」は当代のフランス詩人 Froissart (ll. 40—43; 53—55; 56—59), Deschamps (ll. 44—49; 60—65) それから Machaut (ll. 50—52) なぞに負う所大である (J. L. Lowes, *PMLA*. XIX, pp. 593f.)  
 けれどもこの他恋する婦人を花に喩えて讃美、恋の仕方を教える寓意は例えば *The Romaunt of the Rose* にも見えている。Guillaume de Lorris が書いた部分で一部を (ll. 1—1705) Chaucer は英語に直している。

Saw I tho,  
 Among a thousand thinges mo,  
 A roser chargid full of rosis,  
 That with an hegge aboute enclos is.  
 Tho had I sich lust and envie,  
 That for Parys ne for Pavie  
 Nolde I have left to goon and see  
 There grettist hep of roses be.  
 Whanne I was with this rage hent [=seized],  
 That caught hath many a man and shent [=destroyed],  
 Toward the roser gan I go;

And whanne I was not fer therfro,  
 The savour of the roses swote  
 Me smot right to the herte-rote,  
 As I hadde all enbawmed be.  
 And if I ne hadde endouted me  
 To have ben hatid or assailed,  
 My thankis, wolde I not have failed  
 To pulle a rose of all that route  
 To beren [=possess] in myn hond aboute,  
 And smellen to it where I wente;  
 But ever I dredde me to repente,  
 And lest it grevede or for thoughte  
 The lord that thilke gardyn wroughte.  
 Of roses ther were gret won;  
 So faire waxe never in ron.  
 Of knoppes clos some sawe I there;  
 And some wel beter woxen were;  
 And some ther ben of other moysoun [=harvest],  
 That drowe nygh to her sesoun,  
 And spedde hem faste for to sprede,  
 I love wel sich roses rede,  
 For brode roses and open also  
 Ben passed in a day or two;  
 But knoppes wille [al] freshe be  
 Two dayes, atte leest, or thre.  
 The knoppes gretly liked me,  
 For fairer may ther no man se.  
 Whoso myght have oon of alle,  
 It ought hym ben full lief [=agreeable] withalle.

Might I [a] gerlond of hem geten,  
 For no richesse I wolde it leten.  
 Among the knoppes I ches oon  
 So fair, that of the remenaunt noon  
 Ne preise I half so well as it,  
 Whanne I avise it in my wit.  
 For it so well was enlumyned  
 With colour reed, [and] as well fynyed  
 As nature couthe it make faire.  
 And it hath leves wel foure paire,  
 That Kynde hath sett, thorough his knowyng,  
 Aboute the rede Rose spryngyng.  
 The stalke was as rishe right,  
 And theron stod the knoppe upright,  
 That it ne bowide upon no side.  
 The swote smelle sprong so wide  
 That it dide all the place aboute—

RR, 1649—1705

I saw the Rose, whan I was nygh,  
 Was greater woxen and more high,  
 Fressh, roddy, and fayr of hewe,  
 Of colour ever yliche newe.  
 And whan I hadde it longe sen,  
 I saw that through the leves gren  
 The Rose spredde to spaunysshing;  
 To sene it was a goodly thyng.  
 But it ne was so spred on bred

That men within myght knowe the sed;  
 For it covert was and close,  
 Bothe with the leves and with the rose.  
 The stalke was even and grene upright,  
 It was theron a goodly syght;  
 And wel the better, withoute wene,  
 For the seed was nat sene.  
 Ful fayre it spradde (God it blesse!),  
 For such another, as I gesse,  
 Aforne ne was, ne more vermayle.  
 I was abawed for marveyle,  
 For ever the fayrer that it was,  
 The more I am bounden in Loves laas.

RR, 3627—3648

Alceste が Queen Anne であるかどうかは別として恋の対象には普通高貴な婦人が考えられた点花へ対しては讃美と忠誠を至すことが要求される（例えば l. 565）。*Romaunt* では愛の神が恋する者の守るべき戒律をモーゼの十戒に倣って十挙げその一つで貴婦人に対する忠誠を説いている。

And for thou trewe to love shalt be,  
 I wole, and comaunde thee,  
 That in oo place thou sette, all hool,  
 Thyn herte, withoute halfen dool  
 Of trecherie and sikernesse;  
 For I lovede nevere doublenesse.

RR, 2361—2366

*Romaunt, Legend* 孰れの場合も愛の神は主君として恋する者の生殺与

奪の権を握り同時に絶対者として恋する者から崇拝される神格を持っている。

Loke ye my servise take at gree [=graciously],  
By thilke feith ye owe to me.

RR, 2105—2106

従って婦人もこの愛の宗教では尊敬崇拝の対象として女王と同時に聖母の属性を持つ。Alceste は綺麗な花として恋する者の讃美と崇拝を一身に集めているだけでなく慈愛溢れる例えば聖母の様な存在として「花の中の花」とも謳われている。

Almighty and al merciable queene,  
To whom that al this world fleeth for socour,  
To have relees of sinne, of sorwe, and teene,  
Glorious virgine, of alle floures flour,  
To thee I flee, confounded in errour.

An ABC, 1—5

#### 雛菊讃美の省略と改竄

ll. 51—52, 64—65, 83—96, 109—118, 183—187, 271—275, 296—299, l. 321, 541, 565 ; l. 50, ll. 57—60, 101—108, l. 543

Fテキストの改竄が 1395 年頃だとすれば Chaucer はこの時期 *Sir Thopas* とか所謂 Marriage Group に属する作品を執筆完了したか或物は平行執筆していたと思われる。この点 Chaucer の興味は婦人の支配、恋する者の服従 (III(D), 817—818 参照) から夫婦和合の倫理へ移行していた。其かあらぬか Chaucer は雛菊讃美を伝える行の大半を省略又は改竄

した。尤改竄は題材に制約されて *Sir Thopas* とか *The Franklin's Tale* とかに見られる様な形は執ってはいないけれども精神はこれらの作品を支えている精神と同じものと考えられる。

And therefore hath this wise, worthy knyght,  
To lyve in ese, suffrance hire bihight,  
And she to hym ful wisly gan to swere  
That nevere sholde ther be defaute in here.  
Heere may men seen an humble, wys accord;  
Thus hath she take hir servant and hir lord,—  
Servant in love, and lord in mariage.  
Thanne was he bothe in lordshipe and servage.

V(F), 787—794

# **Maying, ll. 103—112**

I(A), 1497—1512:

And Arcite, that is in the court royal  
With Theseus, his squyer principal,  
Is risen, and loketh on the myrie day.  
And, for to doon his observaunce to May,  
Remembring on the poynt of his desyr {i.e. Emily},  
He on a courser, sterting as the fyr,  
Is riden in-to the feeldes, him to pleye,  
Out of the court, were it a myle or tweye;  
And to the grove...

...his wey he gan to holde,

To maken him a gerland of the greves,  
 Were it of wodebinde or hawethorn-leves,  
 And loude he song ageyn the sonne shene:  
 'May, with alle thy floures and thy grene,  
 Wel-come be thou, faire fresshe May,  
 I hope that I som grene gete may.'

**'Blessed Be Seynt Valentyn,' ll. 145—147**

PF, 309—315:

For this was on seynt Valentynes day,  
 Whan every foul cometh ther to chese his make,  
 Of every kinde, that men thenke may;  
 And that so huge a noyse gan they make,  
 That erthe and see, and tree, and every lake  
 So ful was, that unnethe was ther space  
 For me to stonde, so ful was al the place.

**'Doth Wel to Creature,' A ll. 138—140**

宮廷恋愛は決して a carnal love を否定するものではない(例えば *The Romance of the Rose*, tr. H. W. Robbins, ll. 21717—21730 参照) けれども改竄に際し新たに付加えた是等の行には明らかに例えば

Bet is... a pyk than a pykerel,  
 And bet than olde boef is the tendre veel.



E, 1419—1420

に見られる如き肉に対する興味、或意味では少々巫山戯た口調が顔を出している。 *The Merchant's Tale* で January が May と 'han som plesaunce' と思って 'strepen hire al naked' (ll. 1958—1959) させた後 Chaucer は Merchant に January が何をしたか May にはそれが極楽だったか地獄だったかそういった事は身分ある方々の怒を買うといけないから言わないことにさせ勝手放題二人の好にさして置けば孰れ夕の鐘が鳴る時分には起きましよう (ll. 1962—1966) といった人間性に対する理解を見せている。

**The Lady の属性, ll. 160—163**

Daunger, Mercy, Pitee, Innocence, Curtesye これらの概念は凡宮廷恋愛では貴婦人の属性を表わす言葉であるけれど宮廷愛が婦人を神として崇め恋する者に愛を成就さす上で Vylanye とか Rebaudrye, Pride, Avarice といった悪徳を戒め Curtesie とか Humilite, Mirth とか Franchyse なぞの美德を要求する点, Richesse とか Luxurie とか教会が非とする貴族的, 人間的要素は多々あるとしてもキリスト教の教と矛盾するものではない。

Daunger. RR, 3549—3551:

Wherfore I [i.e. Pite] pray you, sir Daunger,  
For to mayntene no lenger heer  
Such cruel werre agayn youre man.

Pitee. RR, 3499—3506:

And while I was in this torment,  
 Were come of grace, by god sent,  
 Fraunchise and with hir Pite.  
 Fulfild the bothen of bounte,  
 They go to Daunger anoon-right,  
 To forther me with al her myght,  
 And helpe in worde and in dede;  
 For well they saugh that it was nede.

Mercy. *RR*, 4569—4572:

Abide in hope til Love, thurgh chaunce,  
 Sende me socour or allegeaunce,  
 Expectant ay till I may mete  
 To geten mercy of that swete.

Innocence. *E*, 1047—1048:

And she ay sad and constant as a wal,  
 Continuyng ever hire innocence overal.

Curteis. *RR*, 2004—2008:

For curteis and of faire manere,  
 Well taught and full of gentilnesse,  
 He muste ben that shal me kysse;  
 And also of full high fraunchise,  
 That shal attayne to that emprise.

因に是等のうち Daunger は兎も角も外は孰れも宗教性を持っていて Chaucer では Innocence は *The Parson's Tale*, Curteis [=Gentillesse] は *The Wife of Bath's Tale*, Pitee, Mercy は等しく聖母の属性を表わす言葉として *An ABC* に用例が見受けられる。

Innocence. I, 880—885:

God made mariage in paradys, in the estaat of innocence,  
to multiplie mankynde to the service of God.

Gentillesse. D, 1128—1132:

'Ful seldè up riseth by his branches smale  
Prowesse of man, for God of his goodnesse  
Wole that of hym we clayme oure gentillesse;  
For of oure eldres may we no-thing clayme,  
But temporel thyng, that man may hurte and mayme.'

Pitee. *ABC*, 136—137:

For ever in you is pitee haboundynge  
To eche that wol of pitee you biseche.

Merci. *ABC*, 130—134:

For certeynly my Fadres chastisyng  
That dar I nought abiden in no wise,  
So hidous is hys rightful rekenynge.  
Moder, of whom our merci gan to sprynge,

Beth ye my juge and eek my soules leche.

**‘Balade,’ II. 249—269**

B, 60—76参照.

Who so that wole his large volume seke.  
 Cleped the Seintes Legende of Cupide,  
 Ther may he seen the large woundes wyde  
 Of Lucesse and of Babilan Tesbee;  
 The swerd of Dido for the false Enee;  
 The tree of Phillis for hire Demophon;  
 The pleinte of Dianire and of Hermyon;  
 Of Adriane and of Isiphilee;  
 The bareyne yle stondyng in the see;  
 The dreynte Leandre for his Erro;  
 The teeris of Eleyne; and eek the wo  
 Of Brixseyde, and of the, Ladomya!  
 The crueltee of the, queene Medea!  
 Thy litel children hangyng by the hals.  
 For thy Jason, that was in love so fals!  
 O Ypermystra, Penolopee, Alceste,  
 Youre wifhede he comendeth with the beste!

**‘A Verray Propre Fol,’ A II. 258—266**

IV(E), 1274—1276参照.

Where as thise bacheloris synge “allas,”  
Whan that they fynden any adversitee  
In love, which nys but chilydyssh vanytee.

齡を重ねるに従って当然恋する者の関心は恋愛から遠ざかって行く訳のもの（例えば *Merciles Beaute*, l. 27参照）だが愛の神が恋する者に掟の履行を要求する点、亦 *January* みたいな老騎士が若い女房と肉の生活を愉しんでいる（宮廷恋愛のカリカチュア）点「愛」に対する積極的批判は矢張異端。RR の *Raisoun* の言葉参照。

4879—4888 :

For of ech synne it is the rote,  
Unlefull lust, though it be sote,  
And of all yvell the racyne,  
As Tulus[i. e. Cicero] can determyne,  
Which in his tyme was full sage,  
In a bok he made ‘Of Age,’  
Where that more he preyseth eelde,  
Though he be croked and unweelde,  
And more of commendacioun  
Than youthe in his discripcioun.

これに反し特に若い時は男女を問わず過を犯し易い事を *Raisoun* が忠告している (ll. 4925—4940) から *Criseyde* の場合も ‘in sovereyn bontee/ Nis noon but God, but neither he ne she’ (IV(E), 2289—2290) という意味では人間的であるけれど宮廷愛の立場からは掟に背いている (*Capellanus, The Art of Courtly Love*, tr. Parry, p. 184参照).

## Cupid の 'Clerkes,' A II. 268—310

Valerye, Titus, Claudyan, Jerome, 是等の偉い人々は孰れも「よき女子のことを筆にて上」した者揃で「悪しき女子一人によき女子は百人も述べおるは」神も「素よりよう御存知」の学僧として愛の神は名を列ねているのだがこの裡 Titus (The Romain, Tytus Livius, *BD*, 1083) は兎も角

Now mot I seyn the exilynge of kynges  
Of Rome, for here horrible doinges,  
And of the laste kyng Tarquinius,  
As seyth Ovyde and Titus Lyvius,  
But for that cause telle I nat this storye,  
But for to preyse and drawe to memorye  
The verray wif, the verray trewe Lucesse.

*LGW*, 1680—1686

他は悉く多少とも女を悪様に言っている。

Claudian. IV(E), 2227—2233:

Pluto, that is kyng of Fayerye,  
And many a lady in his compaignye,  
Folwyng his wyf, the queene Proserpyna,  
Which that he ravysshed out of Ethna  
Whil that she gadered floures in the mede—  
In Claudyan ye may the stories rede,  
How in his grisely carte he hire fette.

Jerome. III(D), 673—675, 682, 685—691

And eek ther was somtyme a clerk at Rome,  
A cardinal, that highte Seint Jerome,  
That made a book agayn Jovinian

And every nyght and day was his custume...  
To reden on this book of wikked wyves.  
He knew of hem mo legendes and lyves  
Than been of goode wyves in the Bible.  
For trusteth wel, it is an impossible  
That any clerk wol speke good of wyves,  
But if it be of hooly seintes lyves,  
Ne of noon oother womman never the mo.

Valerie. III(D), 671—672

He cleped it [i.e. a book] Valerie and Theofraste,  
At which book he lough alwey ful faste.

無論「悪しき女子のこと」同様「よき女子のことも」少し大袈裟に言うと「悪しき女子一人によき女子は百人も述べ」（l. 277）ていない訳ではないけれど、Valeryeの如きは毒舌家 Walter Map (*Cambridge Chaucer*, p. 844) であってみれば Chaucer がそ知らぬ顔をして「ヴァレリウス、リヴィウス、クラウディアヌスは何と申しておる？ ヨヴィアヌスと事変リエロームが何と申しておるか存じておろう」（ll. 280—281）なぞと言っているのは大変な皮肉。

‘Verray Lewednesse,’ A ll. 344—345

ここでも Chaucer はそ知らぬ顔を極込んで宮廷恋愛を揶揄している。  
こうした Chaucer の姿勢は B<sup>2</sup>(VII), 2109—2118にも見えている。

“Namooore of .this [i.e. Tale of .Thopas], for Goddes dignitee,”  
Quod oure Hooste, “for thou makest me  
So wery of thy verray lewednesse  
That, also wisly God my soule blesse,  
Myne eres aken of thy drasty speche.  
Now swich a rym the devel I biteche!  
This may wel be rym dogerel,” quod he.  
“Why so?” quod I, “why wiltow lette me  
Moore of my tale than another man,  
Syn that it is the beste rym I kan?”

‘Le Bon Counseill de Chaucer,’ A ll. 360—363

この外 Chaucer は *Lak of Stedfastnesse* で略時を同じくして  
Richard の治世が恒なきことを嘆いて王に諫言を提している。

Lenvoy to King Richard, ll. 22—28:

O prince, desyre to be honourable,  
Cherish thy folk and hate extorcioun!  
Suffre nothing that may be reprevable  
To thyn estat don in thy regioun.  
Shew forth thy swerd of castigacioun,



Dred God, do law, love trouthe and worthinesse,  
And wed thy folk agein to stedfastnesse.

**‘A Renegat,’ A ll. 400—401**

愛の神が恋に吾身を致した女の話を引き合に出している点これを裏返せば女を罵倒し毒婦のことに興味を持つ者ということになりそうなのだが老齢とも関聯して ‘a renegat’ ということはどうも

I feele me nowhere hoor but on myn heed;  
Myn herte and alle my lymes been as grene  
As laurer thurgh the yeer is for to sene.

IV(E), 1464—1466

といった肉欲の暗示がある様な感じもしないことはない。

**‘Of the Wretched Engendrynge of Mankynde,’ A ll. 414—415**

韻文、散文孰れにせよ1390年頃 Chaucer はこの論文を英訳していたと考えられている (*Cambridge Chaucer*, p. 845) からこの後 LGW のA テキストでこの作品に言及したのであろうが、大体同じ時期に *Truth* などを書いている点 Lollard Knights に何か関係があるのではあるまいか。この時期 Chaucer は次第に年を取り改めて魂の必要を覚えたことも然り乍ら、漸々と Richard の親政が実現しフランスとの和平交渉 (91年以後) これに続く Isabella との婚約 (95年), ローマ教皇 Boniface IX との和解工作 (90年, 93年) など一連の政策変換があつて95年には Lollard Knights が議会に提出した意見書に対し王は Sir Richard Stury に異

端信奉の放棄を誓言させているのでこういう点に対する配慮がなかったかどうか？ 因に *Truth* は Chaucer の親友 Sir Lewis Clifford の娘婿 Sir Philip de la Vache に与えたバラッドで何が真理であるか分らない、それだけに一番身近な自己を確な真理とすることが肝要だと忠告している。

Flee fro the prees, and dwelle with sothfastnesse,  
 Suffyce unto thy good, though it be smal;  
 For hord hath hate, and climbing tikelnesse,  
 Prees hath envye, and wele blent overal;  
 Savour no more than thee bihove shal;  
 Reule wel thyself, that other folk canst rede;  
 And trouthe thee shal delivere, it is no drede.

*Truth*, 1—7

‘The Tale of Alcestis,’ ll. 548—553

Chaucer は『列伝』の中で Alceste の話を書く処まで行かなかったのだが Gower は Chaucer とは違った扱い方で Alcestis の話を簡単に紹介している。 *Confessio Amantis*, VII, ll. 1917—1949 参照。

(昭和42年9月28日受理)